

藍染川

古名 染川

前

シテ 都の女

子方 梅千代

ワキヅレ（左近）

宿のあるじ

後

ワキ 太宰府の神主

トモ 神主従者

シテ 天満天神

季は 地は
雜 筑前

シテ、子次第

「忘れは草の名にあれど。く。忍ぶは人の面影。

シテサシ

「是は一条今出川に住む女にて候。實にやあだなる
契りとて。心をさへに筑紫人の。袖触れそめし憂
き中の。疎くなりぬる身のはては。兎にも角にも
あらばあれ。此子が為めに父を尋ねて。

下歌

「馴れもなれぬに遠旅の。心は子にや迷ふらん。

上歌

「筑紫とは。西ぞとばかり聞きしより。く。月の

入るさをしるべにて。行方も知らぬ旅衣。野山い

くへか重ぬらん。かゝる思ひを菅の根の。長門の
関路程もなく。香椎博多を打ち過ぎて。宰府には
やく着きにけり。く。

シテ詞

「あらうれしや急ぎ候ふ程に。宰府とやらんに着き
て候。まづ此所にて宿を借らうずるにて候。此方
へ來り候へ。如何に此屋の内へ案内申し候。

左近詞

「誰にて渡り候ふぞ。

シテ

「是は都方の者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。

左近

「心得申し候。是は女性旅人にて候ふ程に。奥の間に置き申さうするにて候。此方へ御入り候へ。

シテ「いかに申し候。此所に宰府の神主殿と申す人の渡り候ふか。

左近「中々の事此在所の主にて御座候。我等も其御内の者にて候。

シテ「都より文をことづかりて候。神主殿へ参らせられて賜はり候へかし。

左近「易き御事にて候。やがて届けて参らせうするにて候。

シテ「あらうれしや候。さらば此文を参らせ候。御返事を取りて賜はり候へ。

左近「心得申し候。誰か渡り候。

狂言「シカく。

左近「さん候神主殿へ申し上ぐべき子細あつて参りて候。

狂言「シカく。

左近 「それは恐れがましく候。

狂言 「シカく。

左近 「都より女性旅人の我等が宿に御泊り候ふが。此文を神主殿へ参らせよと申され候。

狂言 「シカく。

左近 「畏つて候。

狂言 「シカく。

左近 「さん候幼き人を連れ申されて候。

狂言 「シカく。

左近 「いまだ某が屋に御座候。

狂言 「シカく。

左近 「言語道断。さやうの御事をば存ぜず候ふ程に留め置きて候。さらばやがて追ひ出だし申さうするにて候。

狂言 「シカく。

左近詞 「いかに旅人へ申し候。唯今の文を神主殿へ御目に

かけて候へば。やがて御返事を賜はりて候。急いで御覧候へ。

シテ詞

「あらうれしと早く御届け候ふ物かな。さらばやがて御返事を見うづるにて候。御下りめづらしく候へども。男の身なりとも。遙々の遠国にひとりは下りがたし。いかさまめづらしき人に誘はれて御下りかと思ひ候へば。対面申す事はあるまじく候。是は梅千代が方へ申し候。本より此身は不肖なれかやあらあさましや候。

シテ
「いかに母上いたくな御嘆き候ひそ。梅千代斯くて候へば。御心安く思し召せ。

シテ
「實に子ながらも恥かしや。父が心の変はる事を。身の上に嘆くと思ふかや。御身を父に見せ。一跡をも継がせばやと思ひてこそ。遙々伴なひ下りた

るに。孤となすべき事の悲しさよ。

子「よしなふそれも力なし。今さら何と嘆くべき。

地「筑紫人。空言すると聞きつるに。く。頼みける
こそ中々に。はかなかりける心かな。かきくらす。
心の闇のひたすらに。夢現なき道のべの。便と頼
む木陰さへ。今は亡き身となるべしと。思ふに付
きて独子を。残し置くべき悲しさよ。く。

左近詞

「如何に申し候。御痛はしう候へども。神主殿より

此所には置き申すなどの御事にて候ふ間。急いで
此屋を出でゝ何方へも御出であらうずるにて候。

シテ詞

「いかに梅千代。

子「何事にて候ふぞ。

シテ「此まゝ都に上らん事も人目さすがに候へば。あれ
なる菴室に立ち越え。様かへばやと思ふなり。御
事は是に待ち給へ。

子「いや／＼母の御けしき心もとなく候ふ程に。離れ

申す事は候ふまじ。

シテ
「うたてやな父こそ変はり給ふとも。母が心の変は
るべきか。唯々御事は此所にて。母が帰さを待ち
給へ。

子
「母の仰せをまことゝ思ひ。さらばとくく帰り給
へ。

シテ
「母は今こそ限りなれと。下安からぬ思ひの色。行
きもやられぬ袖の別れ。

子
「引きとめられて。
シテ
「親心の。

地
「思ひわづらふ母が身の。く。亡き跡いかゞと。
別れ得ぬ今のは憂き身かな。兎に角に。帰らんまで
は待ち給へと。夕顔の空目して。藍染川に身を投
ぐる。く。
(中入)

左近詞
「何と申すぞ。藍染川に人の身を投げたると申す
か。如何やうなる者ぞ立ち越え見ばやと存じ候。

や。言語道断。いかなる者ぞと存じて候へば。某
が所にとまりたる女性にて候ふは如何に。なふ梅
千代殿母御の身を投げ給ひて候ふぞ。急いで御覽
候へ。

子
「なふ母上。恨めしの御有様やな。母御のかくてま
しませばこそ。頼もしく思ひ候ひつるに。是は夢
かやあさましや。悲しやな知らぬ筑紫のはてに来
て。父母さへに捨子となる。自らは誰を頼むべき。

地
「末の露。本の雪もよしやよし。我とても。ながら
へ果てじ身を捨てゝ。母に追ひ付き申さんと。藍
染川に歩み行く。く。

「暫く。是は勿体なき御働きにて候。御事身を投げ
給ひては。さて母御の御跡を誰か弔ひ申すべき。
唯思し召しとまり給ひ候へ。是は母御の遊ばされ
たる文にて候。御形見によく御持ち候へ。かかる
痛はしき事こそ候はね。

「是は宰府の神主にて候。我此間は他所に候ひて。唯今罷り帰り候。あら不思議や。あの藍染川に人の多く集まりて候ふは何事にて候ふらん。や。推量申して候。某他所に候ふ間に網を引かすると存じ候。如何に誰がある。」

トモ「御前に候。」

ワキ「あの藍染川に人の多く集まりて有るは。網をばし引くか。殺生禁断の所にてあるに。急いで皆々上

れと申し付け候へ。」

トモ「畏つて候。やあく神主殿の御出にてあるぞ。網をばし引くか。殺生禁断の所にてあるぞ。急いで皆々上り候へ。何と人の身を投げたると申すか。や。左近の尉にて渡り候ふか。是へ神主殿の御出でにて候。急ぎ御参りあつて。此謂を御申し候へ。」

左近「心得申し候。」

トモ「いかに申し上げ候。網にてはなく候。人の身を投

げたる由申し候。あれに左近の尉が候ひて。謂を申し上げうずるとて是へ参りて候。

ワキ「いかに左近の尉。身を投げたると申すはいかやうなる者ぞ。」

左近「さん候都より女性の人を尋ねて下り候ふが。逢はぬを恨みて身を投げたる由申し候。」

ワキ「言語道断。都よりはるぐ下りたるに。逢はぬは不得心なる者にてあるよな。あれなる幼き者はいかやうなる者にてあるぞ。」

左近「あれは彼者の子にて候。」

ワキ「手に持ちたるは文にてあるか。」

左近「さん候文にて候。」

ワキ「そと見たき由申して取りて來り候へ。」

左近「畏つて候。なふ其文をそと人の御覽ぜられたき由仰せ候ふ賜はり候へ。」

子「いや是は母御の御形見にて候ふ程に。参らせ候ふ

左近
まじ。

「そと御覽じてやがて返し申されうずるにて候。此
方へ賜はり候へ。文を取りて参りて候。

ワキ詞

「是は梅千代が方へ書き置き候。憂き身はもとより
捨妻の。きぬぐなれば恨みもなし。いかに情知
らずとも。子に知れぬ親の候ふべきか。いひかひ
なくは出家になし。扶持し給はゞ草の蔭にて。守

りの神となるべきなり。大内にありし時は梅壺の
侍従。一条今出川の御留主。当所の御名は知らね
ども。御在京の御時は。中務頼澄宰府の神主。や。

言語道断の次第にて候ふ物かな。今までによその
事とこそ存じて候ふに。かゝる不思議なる事こそ
候はね。あの幼き者を此方へ連れて來り候へ。

左近
「畏つて候。如何に申し候。神主殿の物仰せられう
づると仰せ候。此方へ御出で候へ。

ワキ
「あら不便の者や。さて真の父に逢ひたくはなきか。

子「かほどに情ましまさば。父に逢はせてたび給へ。

ワキ「實にくく是は理なりと。名乗らんとすれば涙に咽び。

子「目も暗れ心。

ワキ「月かげに。

地「それと見えねど梅千代が。顔も姿も馴れし母に。たがはね面影の。是こそ父よ無慚やな。さこそ便も嘆きの。力を添へて木綿附の。取り付き髪かき

撫で。よそめ思はぬ氣色かな。

「いかに左近の尉。余りに彼者不便に候ふ程に。そと見うずると思ふはいかに。

左近「御意尤にて候ふさりながら。御姿にてはいかゞにて御座候。

ワキ「實にくく汝が申す如く。総じて死人を見る事はなけれども。彼者の心中あまりに不便にある間。苦しからぬ事そと一目見うずるにて有るぞ。死骸の

ワキ詞

あたりなる人をのけ候へ。

左近
「畏つて候。やあく神主殿御出で有るぞ。皆々の
き候へ。

ワキ詞
「如何に申し候。さても御下り夢にも知らず候。梅
千代が事は某一跡を譲り世に立てうずるにて候。
又御跡をも懇に弔うて参らせ候ふべし。かまへて
我を恨み給ふなと。いへどもいへども。

地クセ
「いへども平生の顔色は。草葉の色に異ならず。芳

態あらたに眠りて。眼蓋を開く事なし。嬢娟の黒
髪は。乱れて草根にまとはり。婉轉たる黛は。消
え失せて面影の。亡き身の果ぞ悲しき。

ワキ
「紅顔空に消えて。

地
「華麗を失へり。飛揚の魂何処にか独趣く。有様あ
はれむべし。累々たる古墳の辺り。顔色終に消え
失せて。郊原に朽ち果てゝ。思ひや跡に残るらん。
「いかに左近の尉。彼者の心中あまりに不便にある

間。臨時の幣帛を捧げ肝胆を碎き。彼者の命を二度蘇生させばやと思ふは如何に。

左近「実にく是は尤にて候。

ワキ「さらば祝詞を参らせうするにて候。

左近「然るべう候。

ワキ「神主御幣おつ取つて。神前に参り跪き。既に祝詞を申しけり。謹上再拝。我此道場如帝珠。十方三宝影現中。我身敬礼三宝前。頭面接足帰命礼。

南無天満天神。広く旧里を去つて。遍ねく幕下を兼ねたり。明才衆に越え。明智世に勝れ。西海の西都に。安樂寺の地を点じて。春秋を招く。

地「やあ本地観音如来。寂光の都を出でゝ。此太宰府に住み給ふ。

後ジテ「唯頼めしめぢが原のさしも草。我世の中に有らん限りは。

地「御殿しきりに鳴動して。顯はれ給ふぞかたじけな

き。昨日は北闕に。く。悲しみを蒙る身なれ
ども。今日は西都に蘇さんと。生きて恨み死して
歎ぶ。有難の誓ひや。

シテ
「そもそも当社と申すは。

地
「そもそも当社と申すは。法性の都を出でゝ。分段
同語の境に入しより此方。冥々と有る苦海に沈み。
菩提涅槃に至らず。こゝに宿因内に通じて。受け
がたき人身を受け。智識外に助け。逢ひ難き誓ひ
こびの祝詞を奉れば。神は上らせ給ひけり。